

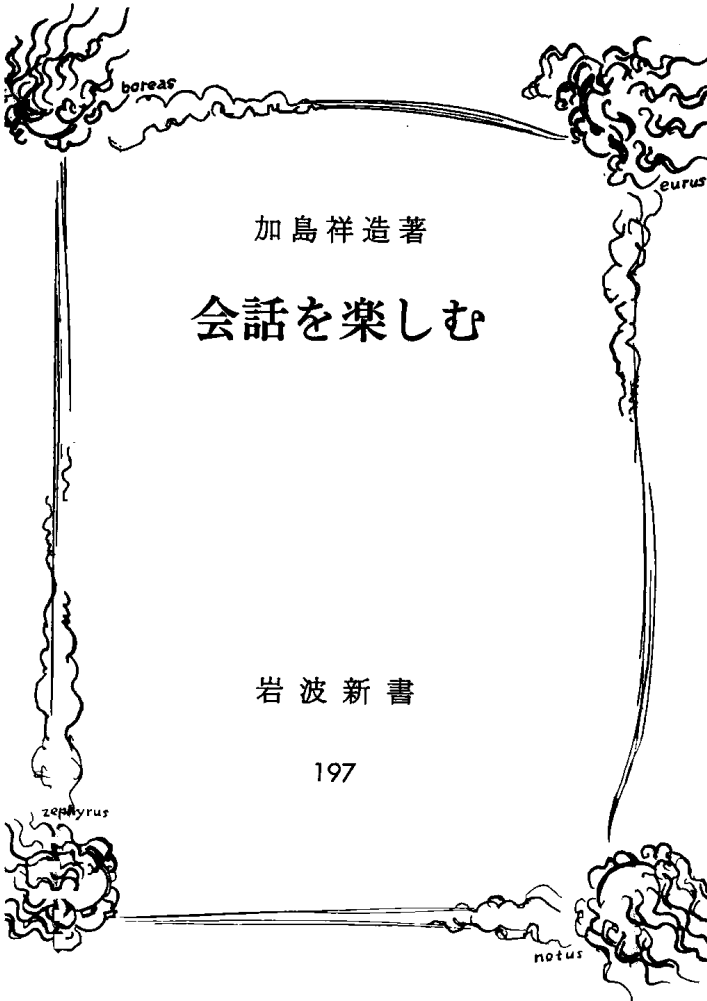
加島祥造著

会話を楽しむ



岩波新書

197



加島祥造著

会話を楽しむ

岩波新書

197

加島祥造

1923 年東京に生まれる

1946 年早稲田大学文学部英文科卒業

信州大学，横浜国立大学，青山学院女子

短期大学で英文学を教える

専攻—アメリカ文学，詩

現在—著述業

著書—「英語の辞書の話」「引用句辞典の話」

(講談社・学術文庫)

「英語の中の常識」(上・下，大修館)

「アメリカン・ユーモアの話」(中公文庫)

「フォークナーの町にて」(みすず書房)

詩集—「晩晴」(現代思潮社)，「放曠」(書肆山田)ほか

訳書—フォークナー「兵士の報酬」「サンクチュアリ」「八月の光」(新潮社)，「野性の棕櫚」(学習研究社)

マラマッド「短篇集」「アシスタント」(新潮社)

ラードナー「大都会」(新書館)ほか

会話を楽しむ

定価はカバーに表示してあります 岩波新書(新赤版)197

1991 年 12 月 20 日 第 1 刷発行 ©

1995 年 4 月 5 日 第 8 刷発行

著者 かじましようぞう
加島祥造

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・精興社 カバー・半七印刷 製本・田中製本

ISBN 4-00-430197-1

Printed in Japan

目

次

1	トーク カンパセーション 話と会話	1
2	平凡さとその効用	9
3	私たちの会話意識	25
4	さまざまな会話段階	41
5	独演家と相槌屋について	63
6	会話とゴルフ・レッスン	83
7	「なぜなら」と「描写」と	91
8	ア・ボ 退屈屋	99
9	ミス・リードの話	111

10	母親 ^{マザリ・タンク} の舌	127
11	言つてはならぬこと	137
12	ゆっくり話すこと	145
13	オープンな心について	155
14	ダブル・スタンダードと対等観について	167
15	輝かしい会話	183
16	会話の発見	203
	風 ^{たこ} をおろす——あとがきにかえて	211

対話は興あらせたまものなり。

——森鷗外（『智慧袋』）——

1

トク 話と カンパセーション 会話

人と人が言葉を交わしあうこと——それが会話だとすれば、会話とは大きな社会活動である。広い普遍的な活動であり、平易に言えば、それは世界じゅうで、すべての国の人々が、老若男女を問わず、毎日行なっており、食事とセックスの次に人間が古来から親しんでいることだ。それであるのに、前の二者ほどは考察されていないし、興味の対象になっていない。

近年になって言語学界では日常会話を材料にして言語分析をするようになった。そういう研究がやや盛んになったようだ。しかし私はまったく反対の方向に目をむけようとする。自分の経験と観察にもとづいて、「会話」の在り方と働きを考察してみようとする。

一般に私たちは会話についてごく無関心できたし、現在もそれをあまり自覚して考えたりしないのではないか。他人事のように言ったが私自身も無関心派のひとりだった。しかし外国文学を読むことが長かったために、少し「会話」に注意をむけるようになった。というのも西洋諸国民は一般にお喋り好きであり、とくに近世以来は個人の表現の自由がしみわたって、会話を楽しむ気風が強い。私はその一端をかい間見たのであり、そこから振

り返って私たちの会話観や会話意識を考えた時、そこにまだ誰も^{くわ}入れない領域のあるのに気づいた。そこに少しずつ^{くわ}入を入れてゆくのがこの小論である。誰かの説への共感や反発の議論をするつもりはない。

「会話」は英語の conversation にあたる用語で、日本語のほうはこの英語の訳からはじまった。明治期の翻訳語のひとつと思われる。漢文には古い用例があるが、わが国では明治以後の用例しか私には見当らない。それ以前の日本語には「はなし」(話、咄、噺)といった語が用いられた。この古来の言い方が口語としてしっかり働いているので、私たちはいまでも「あの人と面白い話をした」というが、「あの人と面白い会話をした」とは言わない。

この「話」にあたる英語は talk。「話」は古来の「大和言葉」、talk も古来からの英国語であり、いっぽう会話と conversation はともに輸入外来語だ。すなわち会話は中国から、conversation は英国がフランス語から十四世紀にとり入れた言葉だ。私たちはいま、「話」を平易な喋り言葉として使い、「会話」をやや特別の場合だけに限って使うようだが、しか

しかなり曖昧に併用している場合もある。

私たちの現代文からひとつの例だけを出しておこう。安藤鶴夫「秋彼岸」(随筆集『雨の日』は谷中の全生庵に円朝の墓を訪う随筆であり、その一節――

「全生庵の本堂に向って、右の方に、裏の、墓へいく道があるが、この道は歩いてい
ると、何だか円朝の作物きくもつの中にいるような気がしてくるから、妙である。

それほど、なんだか、古風なムードがある。途中に、義太夫の墓があったり、そんなことも、そんなムードにさせるのかも知れない。これが、東京か、と、いつも思うのである。木の古びも、明治を回想させるのに、ちょうどいい古びである。

正面、一段高く鉄舟の墓がある。(中略)この鉄舟の墓から、なんともいい配置で、細い小道をへだてて、円朝の墓がある。

鉄舟がすわっているとして、その鉄舟の位置からいうと、左の方に、ちょっと顔を向けて、円朝、いい月だな、という、はい、仲秋名月にございます、というような、

そんな会話がきこえてくるような、墓の配置なのである。

つまり、なにかというと、そんな会話をしているのではなからうかと思われるような、そういう配置の墓なのである。

わたしは全生庵の墓へまいると、鉄舟の墓から、はるか、うしろへさがって、右に、円朝の墓の見えるところに足をとめて、この二人の明治びとの墓が、いったい、どんな話をするのかと……」(傍点は加島)

この一文のなかには「会話」の語が二度、そのあと「話」が一度使われている。この両語を入れかえて使っても、少しも変ではない。「円朝、いい月だな、というと、はい、仲秋名月にございます、というような、そんな話がきこえてくるような」とあっても、少しも変でないし、誤用でもない。しかし安藤氏は個人的な感覚から、ここでは「会話」を使い、あとを「話」として、なかなか微妙に使い分けている。

英語でも talk と conversation とはだいたい曖昧に併用されている。このほうでも一例

だけ挙げよう。『英国口語用例集』(The Oxford Book of English Talk, Oxford, 1953)は英国の十五世紀から現在までの平易な喋り言葉の文例を集めている。こんな用例集はこの本が最初のものだと編集者は自慢しているが、この本の序文は次のようにはじまっている——

「英国人は……幾世紀にもわたって話^{スピーキング}してきている。毎日毎日一時間いや一分きざみで喋る——それもレストランや酒場、列車の客席や遊覧バスのなかで、そして教会やフットボール試合や葬式のあとで——実に想像を越えた大波の満ちたり引いたりするように、われらのまわりを会話 conversation が渦巻いている。人間は話 talk をする存在であり、また話せずにはいられない存在なのだ」

talk は日常のお喋りのような気軽な場合から、反対の「本気な交渉」という意味合いまで広く使われる(その点では日本語も同じで、「はなしをつける」とか、「君にはなしがある」という場合のはなしのように、相当に重大な意味にも使われる)。conversation はもっと意識的なコミュニケーションを指す時に使うようだ。

あるアメリカ人の政治家は、日本政府との交渉会議のあとで、その表面的で内容のない

話し合いに対して、次のように言った——「ただちょっと会話があったただけだ——それ以上のはなにもなかった」“We had some conversation……yes, it was just a conversation and nothing more than that.”

私のこの本では「話」でなくて「会話」のほうを用いる。それというのも私は「話」や「お喋り」という大きな領域を、もう少し意識的に限定しその輪郭を描こうとするからである。

それではここで私の言う「会話」には、どこに中心問題があるのか。私が中心とするのは「生きた会話」であり、「楽しみと喜びの会話」であり、そこから会話の本当の姿をとらえようとする。それがこの小さな本の主題だとまず言っておきたい。

おれはね、頭が我慢できないようなことを、口にしないようにしてるのさ。

——ルイ・アームストロング——

2 平凡さとその効用

いいかげんな会話

しかしこの本題にはいる前に、まず私たちのまわりを見回したい。私たちはいかに「死んだような会話」にとりまかれていることか。私たちの日常生活はいかに「楽しくない会話」や「喜びのない会話」に占められていることか。私たちの会話はいかにただの実用だけの会話に終わっていることか——この現実にまず目を向けておきたい。こうした点は誰でも気づいていることであるけれども、改めてここをはっきり胸に納めてもらわないと、本題である「生きた会話」や「喜びの会話」がはっきり輪郭を現わしてこない。

二千年以上も前に中国の莊子は次のようなことを言っている——

「そもそも、ものを言うのは、たんに音を吹きだすことではない。ものを言った場合、その言葉には意味があるものだ。その意味がいい加減で浮ついていたら、はたしなくてももの言ったことになるのか。それでも雛鳥の鳴き声とは違うという人もいるだろ

うが、なに、さほど違いはないんじゃないか」

（莊子『齊物論』）

ただ喋くるだけじゃあ、雛鳥ひよこのピーピーいうのと同じことさ、と言うわけだが、そういうお喋りは莊子の五千年も前から、二千年後の現代まで、あらゆる国の人々の交わしてきた会話だと言える。

現代ではその雛鳥的なお喋り会話は衰えるどころか、さらにはげしさを増している。ここでは現代の日本で最も莊子的な人物だったと思える人、辻まこと、の短かな語句を挙げておこう――

「私は人と人との会話を、かなりいいかげんなものだ、と感じている。すべての会話は、会話を構成しない――といったら、言いすぎだろうか」

（辻まこと「詩――かっこう――のまわりで」）

断っておきたいが、辻まことは老莊の思想を受けついだかどうか、知らない。しかし彼は莊子と同様に、きわだった自由な思考と行動と観察に生き、それを機知とユーモアと風